

報道関係者各位

2025 年 5 月 29 日

国立成育医療研究センター

**医師の働き方改革が小児科専攻医に及ぼす影響を調査
～5 年間で勤務時間・日数の減少と精神衛生が有意に改善～**

国立成育医療研究センター(所在地:東京都世田谷区大蔵、理事長:五十嵐隆)総合診療部・教育研修センターの中尾寛、野村理、利根川尚也、窪田満、石黒精は、2024 年度に施行された医師の働き方改革に伴い、当センター内小児科専攻医の労働環境改善の内容と、その影響に関する調査を行い、報告しました。

2019 年度から働き方改革関連法案が順次施行され、2024 年度に医師の働き方改革が施行されました。これは医師の時間外労働の上限を原則的に年間 960 時間に規制し、医療の質、安全を担保することを骨子としています。そこで 2019 年から、2024 年度の医師の働き方改革施行に向けて小児科専攻医の労働環境の改善を行い、横断調査を実施しました。その結果、5 年間で勤務時間の減少と精神衛生の有意な改善が見られました。

		2019（n=37）	2024（n=34）	P値*
回答者数/対象者数（％）		37/39（95）	34/42(81)	
年齢 中央値（四分位範囲）		29（28-31）	28（27-30）	
男性/女性		17/20	15/19	
労働時間/週 中央値（四分位範囲）		69.0（63.0-72.0）	64.0（60.0-69.0）	0.04
夜勤・休日日直回数/月 中央値（四分位範囲）		5（4-5）	4（4-5）	0.002
休日日数/月 中央値（四分位範囲）		4（3-5）	4（4-5）	0.07
午後休み遵守数（％）	夜勤入り	26（70）	29（85）	0.16
	夜勤明け	24（65）	31（91）	0.01
CES-D（うつスクリーニング） 中央値（四分位範囲）		10.0（5.0-14.0）	7.5（5.3-13.0）	0.55
CES-D ≥ 16（うつスクリーニング陽性者）（％）		8（22）	7（21）	1.00
MBI（バーンアウト指標）各副項目				
情緒的消耗感 中央値（四分位範囲）		12.0（10.0-14.0）	7.0（4.0-10.0）	<0.001
脱人格化 中央値（四分位範囲）		9.0（8.0-10.0）	2.0（1.3-5.0）	<0.001
個人的達成感 中央値（四分位範囲）		17（14.0-19.0）	12.0（9.3-15.0）	<0.001

*Mann-Whitney U検定またはFisher正確検定

【表 1】小児科専攻医への横断調査結果

【プレスリリースのポイント】

- 本研究は当センターの小児科専攻医の働き方改革の内容とその影響に関する報告です。
- 働き方改革の取り組みにより、勤務時間と精神衛生は 5 年間で有意に改善しました。
- 研修時間の減少に伴う、専攻医の医学的知識・スキル・患者ケアオーナーシップの低下等が懸念されており、それらへの対処も含めて今後も調査・取り組みを続けていきます。

【背景・目的】

2019 年度から施行された働き方改革は、業務の特性や慣行を理由として、建設業、運搬業、医師、砂糖製造業の 4 部門が 5 年間猶予されていましたが、2024 年度にこれらの 4 部門も対象になり、時間外労働の上限規制が全業種に及びました。医師の各科、各施設でも現場でさまざまな対応が行われていますが、その報告や、医師に及ぼす影響についての調査はまだ非常に少ない状況です。

当センターには小児科専門医を目指す 3 年間の専攻医制度があり、各学年で 11～14 人、合わせて 40 人程度の国内最大規模の小児科専門研修を行っています。3 年間の専攻医研修のうち、半分程度を総合診療部病棟での研修が占めており、夜勤や休日出勤など、時間外労働が月 100 時間を超える専攻医もいるなど、過酷な労働環境が以前から問題となっていました。そこで、当センターの小児科専攻医に対する働き方改革の取り組みを行い、その影響を調査し報告しました。

【研究概要】

2019 年より小児科専攻医に対し、医師の働き方改革に向けて、以下の労働環境改善を行いました。

- 1.『労働時間減少の努力』各病棟診療チームのカンファレンスや回診を時間内に行うよう徹底し、他部署とのカンファレンスも可能な限り勤務時間内に行うよう依頼した。
- 2.『グループ主治医制度の導入』各患者さんに主担当医に加え他の医師も一緒に診療方針を共有することを徹底し、主担当医の不在時も診療が途切れないようにした。
- 3.『振替休日・代休の取得』休日・祝日の当番勤務に対する振替休日・代休を確実に取得できるよう、診療チームごとに毎日の出勤人数を勘案しながら、月ごとに予定を立てるよう変更した。

そして、2019 年 9 月と 2024 年 9 月に全専攻医と総合診療部フェローを対象に横断調査を行いました。内容は、勤務時間や休日日数、夜勤・休日当番の回数などの働き方と、うつスクリーニング (CES-D という指標)、身体的・精神的な疲労感を測るバーンアウト指標 (MBI という尺度) です。これらを比較した結果、5 年間での改善が見られました。

① 働き方

年齢などの属性については、2019 年と 2024 年で変わりはありませんでした。週あたりの労働時間は中央値で 69 時間から 64 時間へ。月あたりの夜勤・休日日直回数は中央値で 5 回から 4 回へといずれも改善していました。夜勤明けの午後の休みの遵守も 65%から 91%と改善していました。

② 精神衛生

うつスクリーニング指標の CES-D については有意な変化はありませんでした。バーンアウト指標の MBI については、3 つの副項目すべてが有意に改善していました。これらの改善は属性・働き方の項目を調整した多変量解析でも有意でした。

【今後の展望・発表者のコメント】

専攻医に対する働き方改革の影響で懸念されることとして、専攻医が減少した分の業務が指導医への負担となること、また研修時間の減少に伴って専攻医の医学的知識やスキルが低下すること、患者ケアオーナーシップ(一人一人の患者さんを主体的に自ら診療する責任感)が低下すること、などが懸念されています。今後も働き方や精神衛生を改善しつつ、これらの課題にも対処していくことが私たちの使命と考え、調査と取り組みを続けていきます。

【発表論文情報】

タイトル : Work style reform for pediatric residents

執筆者 : 中尾 寛¹⁾²⁾、野村 理¹⁾、利根川 尚也¹⁾、窪田 満²⁾、石黒 精¹⁾

所属 :

1) 国立成育医療研究センター 教育研修センター

2) 国立成育医療研究センター 総合診療部 総合診療科

掲載誌 : JMA Journal (日本医師会の英文誌)

DOI : 10.31662/jmaj.2024-0419

【特記事項】

本研究は、成育研究開発費 2023E-1、2024C-13 の助成によって行われました。

【問い合わせ先】

国立成育医療研究センター 企画戦略局 広報企画室 神田・村上

電話 : 03-3416-0181 (代表) E-mail : koho@ncchd.go.jp